

スリランカで多発する慢性腎疾患の原因究明

実施機関：京都大学（研究代表者：小泉 昭夫）

実施期間：平成 22 年度～平成 24 年度

プロジェクトの概要

スリランカ民主社会主義共和国においては、1970 年以降、灌漑設備の建設による北東部の開発がすすめられ、この 30 年間に多くの農民が南東部から入植してきた。しかし、1990 年以降、入植した農民の若年層に慢性腎疾患が多発しており、若年労働力の喪失と人工透析に費やされる医療費の増加により、北東部の経済開発が阻害される事態が生じている。本プロジェクトは、健康上の阻害要因である慢性腎疾患の原因の解明を行うことを目的とし、京都大学、京都大学医学研究科の関連病院である北野病院、ペラデニヤ大学の 3 者で行う。慢性腎疾患の原因の解明は、①慢性腎疾患の病理的検討、②慢性腎疾患の疫学的検討、③慢性腎疾患の遺伝疫学的検討の 3 つのサブテーマを通じて行う。同時に当該分野の人材育成も行い、もって、予防施策の確立および早期診断に資する。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	成果	計画・手法の妥当性	実施期間終了後における取組の継続性・発展性
A	a	a	a	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

(2) 評価コメント

スリランカ北東部に近年高い頻度で見られる慢性腎疾患発症の原因解明を目指して実施された本プロジェクトでは、現地調査などの実施及び研究者の育成などをベースに、スリランカの研究者・行政との間において緊密なネットワークを構築したことは評価できる。また、慢性腎疾患に関する現地での検診に基づく診断の確定、環境要因の調査検討を行い、さらにコホート解析を実施して住民情報の収集と遺伝要因の検討を行い、腎疾患リスク要因として、遺伝的な要因を示し、加えて高血圧や糖尿病などの成人病頻度の高いことも見出して、現地行政に対策の示唆を提供するまでに至ったことは評価できる。発症要因に関する最終的な結論を得るべく、本プロジェクトの成果をもとに、今後さらなる詳細な調査の実施を期待する。

・**目標達成度**：対象とする慢性腎疾患について病理診断を明確にした上で、疫学的、遺伝疫学的検討等を実施し、遺伝的な高感受性がスリランカにおける慢性腎症発症の要因の一つであることを示した。また、コホートを設定して研究の基盤を構築し、スリランカの研究者・行政との緊密な連携体制も構築して、現地行政の対策に向けた示唆を提供するに至っており、所期の目標を達成したと評価できる。

・**研究成果**：詳細にわたる病理検討より、スリランカにて認められる腎症が間質性腎症であることを明らかにし、その早期発見に向けたスクリーニング指標として、 $\alpha 1$ マイクログロブリン

ンを見出し、早期発見に貢献するとともに、遺伝的高感受性が主因のひとつであることを示すなどの成果を挙げている。また、我が国とスリランカの3研究機関をコアに、当該分野の人材育成を図りつつ、行政も含めた連携ネットワークを構築・強化して、慢性腎疾患の原因究明と対策検討の基盤を構築したことは評価できる。

・**計画・手法の妥当性**：本プロジェクトは、実践的公衆衛生活動の側面が強く、基礎研究を超えたダイナミックなアプローチが要求される。本プロジェクトにおいて構築した柔軟な対応を可能とするネットワークは、人材育成や人的な配置設定を含め、こうしたダイナミックなアプローチに有効と考えられるため、用いられた計画、手法は妥当であったと評価できる。

・**実施期間終了後における取組の継続性・発展性**：スリランカの研究機関並びに政府機関関係者とのネットワークが構築され、現地からの要請を受けて、継続的な原因究明研究が計画されていることは評価できる。今後、構築されたネットワークのさらなる展開を期待する。